

勝見 洋一著
講談社現代新書 (二〇〇〇年)

『中国料理の迷宮』

田嶋 信雄

中華民国期の中国外交について史料を調べる必要から、台湾の国史館・国民党党史委員会・外交部文書室を訪問したのは、一九九四年の夏のことであった。その時、すっかり中国文化に魅了されてしまった。まったく中国語の素養がなかった私は、帰国後、ただちに「媽」「麻」「馬」「罵」から学習を開始した。いわゆる「成田決心」の典型である。

私の中国語の先生は李梨先生であった。李梨先生は、私より若干年上で、ハルビン(黒竜江省)生まれの洗練された中国女性である。李梨先生は、私たち教え子をお宅に招待するときには、必ず羊のしゃぶしゃぶ(涮羊肉)を、馳走してくださいさ

た。「羊の薄切り肉は日本ではなかなか手に入らない」と嘆いていたが、新宿小田急ハルク地下の食料品売り場に行けばよいと教えてくれた。しかし私はそのようなときに内心「蒙古族の料理よりも本格的な中国料理が食べたいなあ」と思っていた。浅はかであった。勝見洋一『中国料理の迷宮』を読めば、涮羊肉は正當な北京料理であることが分かる。周辺の料理を取り入れてダイナミックに変動するのが中国料理なのだ。

中国共産党史の中に李立三という人物がいる。党創立者陳独秀が批判されて追放されたあと、党の実権を握り、いわゆる極左路線(都市暴動路線)を指導した人物である。その後コミンテルンに批判され、左遷されるが、中華人民共和國建国後復権を果たす。しかし文化大革命中に再び「主観主義」「セクト主義」を批判され失脚してしまう。文字通り中国現代史の激動を生きた革命家である。

李梨先生が李立三の孫だと知ったのは、最近のことである。そして、李梨先生の

人生もまた現代中国の政治に翻弄されていた。文化大革命の時には極北の地ハルビンから天安門広場を集まり、紅衛兵運動を担った。一九六六年八月十八日の天安門広場での百万人集会が終わったあと、広場には片方しかない靴が山と積まれていたという。私は、ユン・チアンの『ワイルドスワン』を思い出した。

しかも、『中国料理の迷宮』によると、この文化大革命は中国料理にも甚大な影響を与えたのだという。その問題も余り意識したことはなかったので、いささかショックであった。中国料理は、地域的・場所的に異なるだけではなく、時間的・歴史的な、あるいは政治的な影響も受けてダイナミックに変化するということだ。それにしても勝見洋一の描写する文革期の中国料理は悲しい。そこで私は、「李梨先生は、いま中国で食べられる中国料理の味など知らずに育ったのだ」ということに思い至った。『中国料理の迷宮』によれば、「涮羊肉」は、文革後、すぐに復権した料理の一つである。李梨先生

にとつては、「涮羊肉」は、当時、大変豪華なメニューだった筈だ。

初めての台湾訪問以来、毎年一、二回は「仕事」と称して台湾や中国を旅行してきた。中国各地にある文書館（档案館という）を訪問し、一九三〇年代の中国とドイツの關係に関する史料を閲覧するのが目的である。しかし一日の仕事が終わったあとは、中国各地の料理を味わい、美酒に酔うのが無上の楽しみとなった。

蘇州で「松鼠桂魚」という料理を食べたときには喫驚した。太湖で獲れた桂魚に何条も包丁を入れて房状にし、揚げて甘酢あんかけで食べる。魚は爆裂状に揚がり、それを当地では松鼠（リス）と表現するが、私には、魚が手榴弾でも抱えて自爆したかに見えた。鳩の唐揚げも食べたが、目がこちらをじっと見ているようであった。

上海では、人民広場近くの新興レストラングループ「小紹興」に行った。六階に部屋を予約してあったが、小股の切れ上がった美形の小姐が白いチャイナドレスに身を包み、終始我々に仕えた。魚・蟹・鶏料理で贅を尽くし、とりわけしつかり灰汁を取って澄んだ鶏のスープなどが絶品であった。しかも会計は日本円にして一人約三千円。すっかり満足したが、しかし頭のどこかで「社会主義中国がこれでいいのか」と引つかかるものもあった。中国料理は、悲惨な「文革の味」からそれこそ革命的に（あるいは、反革命的に）復活を遂げたと言えよう。私が悶絶しながら食べた「汽鍋水魚」（すっぽんの汽鍋蒸し煮）も「黄燜鰻」（うなぎの油焼き煮込み）も、文革時にはまったく食べられなかった筈だ。

瀋陽では、朝鮮族のレストランで犬肉を食べた。「犬料理」の大宴会。犬の皮、犬のピリ辛煮、犬の蒸し肉などなど。肉の周りの脂身は必要に応じて除去もしたが、「牛肉の大和煮」の歯触りに近く、味は淡泊であった。はて、これは朝鮮料理と言うべきか、あるいは朝鮮族は中国の中の一つとした一民族なのであるから、中国料理であるとも言えるのではな

からうか。なによりも、中国料理は「ケンタッキーフライドチキン」まで換骨奪胎してどん欲に飲み込んでしまうのであるから、そもそも、元々の料理の「国籍」など関係ないのかもしれない。

勝見洋一著『中国料理の迷宮』は、日本料理化した日本の中国料理とは別個のところで拡散する中国料理イメージに、一つのダイナミックな像を与えてくれる。しかもその像とは「迷宮」と表象される像であり、つかもうとしたイメージは再び拡散して新たな迷宮へと我々を誘う。

（たじま のぶお・法学部）

